

学習意欲を高める保健体育科の評価
～柔道の授業を中心にして～

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 授業力高度化コース
116008 小林朋央

学習意欲を高める保健体育科の評価 ～柔道の授業を中心にして～

小林朋央

授業力高度化コース

要約:本研究の目的は、中学校第一学年の保健体育、柔道の授業において、生徒の学習意欲を高めるための評価の在り方を研究し、単元評価計画を作成することである。教職専門実習での経験を元に、柔道のイメージや現状を理解し、なぜ教育評価を工夫、改善する必要があるのかを示す。その後、教科や単元にしばられず、先行研究から「学習意欲を向上させるための評価の要件」を導き出す。そこで導き出した要件をもとに、柔道の特徴を捉え、柔道評価の特異性を列挙し、単元評価計画を立てる。

本研究では、単元の評価計画を作成する際に、指導と評価の一体化はもちろんのこと、評価自体にもそれぞれ系統性を持たせた。孤立して存在する評価規準はなく、学習意欲向上のために、必要な時期、技法、順序などすべてが絡み合った単元評価計画を作成することができた。

キーワード: 柔道 必修化 学習意欲 評価時期 評価技法 評価者 単元評価計画

1. はじめに

平成 20 年 3 月 28 日に文部科学省より「武道」が選択科目から必修科目に変更されることが発表された。そして、平成 21 年 4 月から各地域、学校毎に移行措置が取られた後、平成 24 年 4 月から「武道」の授業は必修化され全面実施となっている。

選択科目であった柔道の授業は、柔道を得意、または好む生徒が参加していたため、非常に学習意欲の高い授業が展開されていた。一方で、必修科目となった柔道においては、多くの生徒が「面白くない」「怖い」「痛い」などという理由により柔道の授業を敬遠する傾向がある。この原因は、小学校の体育で武道は扱われていないため、ほとんどの生徒にとって初めて体験するスポーツであることがあげられる。過去に経験のあるスポーツは特

性や方法を理解しているため、得意な生徒も多く、得意でない生徒も自分の中で何が苦手なのかということをしかりと把握している。しかし、経験したことのない柔道に関しては、得意な生徒が少なく、全体的に意欲の低い雰囲気生まれてしまう上に、何をどのように練習したらよいのか、どのようなところに楽しさがあるのかを理解していない。

こうした現状を考慮すると、教員は、柔道の知識を豊富に蓄え、どのように楽しさを見出させるかを考えた授業を展開しなければならない。しかし、授業に参加する生徒の学習意欲がなければどのような授業を行っても生徒が食いついてこないのが実際のところである。

2. 研究の目的

学習意欲を高める授業を展開しようと考え、当然教員は授業の雰囲気を明るくして、笑顔の絶えない面白い授業を展開しようとする。しかし、武道の授業では、柔道の手や礼儀や作法を重んじているため、厳格な雰囲気授業を実践していくことが求められる。授業中に笑顔が溢れることは、本来の授業の目的や意図から逸れてしまう。したがって、柔道の単元で「楽しい授業」を実践するためには、技をかけ合う楽しさや相手と競い合う楽しさを味わわせること、伝統的な礼儀作法に好感や誇りを持たせること、漠然と柔道の技を教えるのではなく、生徒自身が各々でしっかりと目標を立ててそれを達成していくことが重要であるとする。そのためには、授業において生徒が成功体験を味わうこと、自己評価や相互評価を行い仲間と共に学んでいくこと、また、教員が生徒の技量や資質、生徒の努力の過程を的確に評価する必要がある。そこで求められるのは、目標を立てるための基となる柔道の評価計画の作成を工夫することである。したがって、論者は「学習評価」に着目し、中学校柔道の評価計画を作成、実践することで、生徒の学習意欲の向上につなげていこうと考えた。

3. 教職専門実習における実践

表1の指導計画は教職専門実習で使ったものである。評価規準を作成しているが、実際に授業内で行ったものは実技テストのみである。この実技テストは、二人一組で今まで学習した固め技を連続的に全種類行い、その様子を教師が観察するという形で行った。教師は生徒が試験を行っている周りを巡視し、一つだけ学習したポイントが欠けている生徒の肩を一回、学習したポイントを全く実践できていない生徒の肩を五回叩くというように、

減点方式をとった。試験を開始する前に、肩を叩かれる回数が少ない生徒の成績がよいということは説明しなかった。これは、肩を叩かれた生徒が自信を失ってしまうことを避けるための配慮である。こうすることにより、生徒は緊張感からみんな黙々と試験に取り組んだ。

この評価を単元の中間と最後のまとめの授業の際の計二回行った。試験を行う前の授業で次時に試験を行うことを告げることによって、生徒の学習意欲を向上させることができた。しかし、これを「生徒の学習意欲を高める評価」と呼ぶことはできない。実際に生徒の学習意欲は向上したが、それは試験の前時と当日だけである。この評価は、試験を行うことを伝えることで生徒に焦りを与えて、授業に対する姿勢を正しただけである。この評価を行うことによって、成績とは関係なく柔道の楽しさに気付き、もっと練習して上手になりたいと考えた生徒は存在したのだろうか。学習意欲が高まらないことを理由に実技テストを行ったり、まとめのテストしか行わなかったりしたのでは、学習意欲の維持は期待できないどころか、身につけさせたい力を付けることも困難となる。柔道の特性を考え、どの時期にどのような視点でどのような評価を誰が行うのかをしっかりと考え授業に取り込んでいく必要がある。

表 1 柔道単元指導計画（一部抜粋）

時間	指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価規準【評価観点】 〈評価方法〉
2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 (本時)	補強運動 受け身 固め技練習 ・けさ固め かた固め 横四方固め 上四方固め 乱取り 総復習 ・けさ固め ・かた固め ・横四方固め ・上四方固め 乱取り	・柔道に関連する補強運動の種類を理解し、実践する。 ・固め技の種類を理解する。 ・固め技の基本姿勢を身につける。 ・固め技のポイントを理解し、素早く技がかけられるようにする。 ・連続した技のかけ方を理解し、スムーズかつ効果的に移動が行えるようにする。 ・乱取りの約束事を覚え、遵守する。 ・互いに相手を尊重して乱取りを行い、勝敗を決する。	・全員でかけ声を出させる。 ・補強運動の効果的な方法を理解させる。 ・あごを引き、畳を打つ手は体側から30度程度にさせ、頭を打たないように注意させる。 ・前後左右の間隔をあけさせ、安全に行わせる。 ・固め技の基本的な姿勢について理解させる。 ・連続しながらの固め技およびそのかけ方を理解させる。 ・技の変化およびローテーションの際、2秒間のリズムを厳守できるように指導する。 ・技を変化させる時には、片手が離れる際に自分の体重を利用し、両手が同時に相手から離れてしまわないように指導する。 ・乱取りの行い方を理解させ、素早い変化のある攻防を行わせる。	・基本となる4つの技の中から自分の得意な技を選択し、練習することができる。 【思考・判断】 〈ワークシート・観察〉 ・技を習得するための課題を見付け、練習や試合の仕方を選択している。 【思考・判断】 〈観察〉 ・基本動作を身に付けるとともに、得意技をかけた後、相手の技に応じて変化したりできる。 【技能】 〈観察・実技テスト〉 ・基本動作の重要性と方法について言ったり書き出したりしている。 【知識・理解】 〈ワークシート〉

4 単元評価計画を作成する際の留意点

4.1 学習意欲を高める評価の要件

評価計画を作成する上で、留意する点の一つは、「生徒の学習意欲を高める評価」の要件を導くことである。上述したように、どの時期にどのような視点でどのような評価を誰が行うのが適切かを明らかにしていくことが生徒の学習意欲を高めることにつながると考える。本項では、先行研究をもとに、学習意欲を高める評価の要件を導き出していく。

◆複時的な評価

まず、どの時期に評価を行うかであるが、北尾（2006）は「評価は、指導が終わってから行うものという誤解がある。指導と評価は表裏の関係にあり、両者は一体に進むので、指導のいろいろな段階で評価が行われる。時期によって評価の役割や機能が異なるので、事前、事中、事後に分けてそれぞれの評価の仕方を心得ておきたい」と述べている。

生徒が学習した内容をどれだけ達成することができたかという評価を指導後に行うことが教育評価であると認識しがちである。それも一つの評価であるが、学習意欲を高めるには不十分である。事前にどこまで学習ができそうかを把握するために診断的評価を行うことで、生徒の実態に合わせた学習の展開や評価規準の設定を行うことができる。また、事中につまずきがないかを確認するための形成的評価を行うことで、生徒が毎時間新たな目標を掲げることができる。さらに、事後にどれだけ身に付いたかを評価する総括的評価を行うことで、生徒は自分の成長を実感することができる。これらを踏まえると、学習意欲を高める要件のひとつとして複時的に評価を行うことが大切になる。

◆複視的評価

次に、どのような視点で評価を行うのかについて考える。相対評価から絶対評価への移行に伴い、「集団準拠評価、目標準拠評価、個人内評価」という三種類の評価が注目されるようになった。2001年度の指導要録改訂で相対評価が廃止され、「これからの評価においては、（中略）目標に準拠した評価を一層重視するとともに、児童生徒一人ひとりのよい点や可能性、進歩の状況などを評価するため、個人内評価を工夫することが重要である」（教育課程審議会、2000）と、目標に準拠した評価と個人内評価の結合の路線が明示された。

生徒の学習意欲を向上させるにあたり、生徒個人が自分の努力を認められることは一つの要素である。そこでこの目標準拠評価と個人内評価を用いることによって、柔道に苦手意識を持つ生徒がどれだけ努力し、全体の目標に近づけたかを評価することができる。また他の単元と比較して本単元ではどのような姿勢で取り組み、成長があったかを評価する

ことが可能となる。これは学習意欲の向上を促す評価であると考えることができる。一方で相対評価が廃止されたことにより、集団準拠評価があまり用いられなくなっている。しかし、だからといって集団準拠評価は適用するべきでないということはいえない。少なくとも、仲間と競い合うことの楽しさを味わわせる柔道の授業においては、必要となるだろう。体育の授業では試合をする機会が多い。試合での勝敗を軽視しては、競い合う楽しさは味わうことができない。評定に反映させるか否かは別問題として、授業内の学習評価に集団準拠を用いることもまた、生徒の学習意欲を高めるための一要件である。

◆複法的な評価

続いて、どのような方法で生徒を評価していくかを考察する。鈴木（2012）は、「それぞれの評価技法には特徴があり、学習の場面や評価の観点、評価の目的に応じた適切な評価方法を選択して用いる必要がある。実際の評価技法においては、妥当性や信頼性の点でそれぞれ特徴があり、これらの特徴を考慮して準備・実施していかなければならない」と述べている。

評価技法の選択は教師に委ねられている。つまり、この学習内容にはこの評価技法を用いなければならないというような決まりはない。その反面、教師にその評価技法の選択を行う力が備わっていなければ、生徒をテストの点数でのみ評価するという現状が生まれ、生徒の学習意欲向上は期待できない。各種の評価技法を用いるには、どのような場面や機会に特定の評価技法を用いるかを考えておかなければならない。例えば、行動観察は生徒が学習活動をしている場面であればいつでも可能であるが、ペーパーテストはあらかじめ準備が必要であり、パフォーマンス評価は実施できる回数が限られているので、実施時期の選択はきわめて重要である。また、どのような評価が適しているかを判断する際、評価の妥当性を考慮することが必要である。技能としてしっかり修得しているが、言葉に表すことが苦手な生徒、またそれとは対象的な生徒など一人ひとりの学習意欲を向上させるためには、それぞれに適した評価が必要となる。評価技法を選択し、効果的に幅広く活用していくことが求められる。

◆複眼的な評価

最後にこれらの評価を誰が行うかを考察する。遠藤（2009）は「自己評価とは、自分の活動を点検・確認し、改善・調整していくこと。改善の方針を得るために、自分の学習活動の実態を具体的に把握することが自己評価には必要」と述べている。また、北尾（2006）は「相互評価は、級友同士が互いを評価し合うというものであり、教師による適切な指導

のもとにおいては、有効である。(中略) 自分も向上するが、他人も助け、共に向上しようという雰囲気をつくる学級指導が前提である」と述べている。

もちろん教育評価では、教育目標を設定しそれをよく理解している教師による教師評価が中心的役割を果たすが、一方的な教師評価のみでは、教師の思い込みや偏見が教育評価を歪めることもある。そこで求められるのが、自己評価と相互評価である。自己評価により、生徒が自分自身の課題に気付き改善していく。また教師が気付かなかった生徒の考え方や努力の形を見ることができ、評価することができる。相互評価においては、一緒に学習をする仲間にアドバイスを与えることで自信を持ったり、逆に自分も頑張ろうと思えたりすることが期待できる。この二つの評価を教師評価と併用することにより、教師による一方的な評価、一方的な指導への偏りを是正し、生徒の学習意欲の向上を促すことにつながる。

これらの先行研究を検討した結果、学習意欲を高める評価の4要件を以下の表2に4要件を掲げる。

表2 学習意欲を高める評価の要件

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 複時的（診断評価、形成評価、総括的評価）② 複視的（集団準拠評価、目標準拠評価、個人内評価）③ 複法的（行動観察、実技テスト、学習ノート、ポートフォリオ評価等）④ 複眼的（自己評価、相互評価、教師評価） |
|--|

4.2 柔道の評価の特異性

柔道の評価計画を作成するにあたり、柔道にはどのような特徴があり、他の教科や単元との特異性は何なのかを明らかにする。

柔道の評価の特異性を以下の5つに分類する。

- I. けがの多い種目であるため、行動観察の徹底や、学習ノート等の作成を用いてけがを防止する態度や知識・理解を評価することを重要視する必要がある。
- II. 痛い、怖いというイメージの強いスポーツであることから、正しい形や方法で練習に取り組ませる必要があるため、技能の評価を細かい期間、規準で行う必要がある。
- III. 小学校では学習しないスポーツであるため、学習の進度をしっかりと把握するために形成的評価を中心とした評価を行う必要がある。
- IV. 授業で行う内容は多くの生徒が初めて経験するものであり、運動神経の善し悪しは

関係ないものであるため、誰もが高い意欲で学習に取り組み、技能を上達させることができるよう、関心・意欲・態度の評価規準を明確にする必要がある。

- V. 体格の差が大きく勝敗に影響するスポーツであるので、実践のコツを学習内容で支援するとともに、自分の課題や仲間の良いところを発見し生かしていけるよう、自己評価や相互評価の場면을多く提供する必要がある。

柔道の大きな特徴は「はじめに」で述べた通りである。他の単元においては、各種目にそのスポーツを得意とする生徒が存在し、ある程度授業に能動的に取り組む姿勢が生まれてくる。しかし、中学校1年時の柔道の授業では、先にあげたような柔道の特徴から、ほとんどの生徒が受動的になってしまう。つまり、これらの特徴は同時に、柔道に対する学習意欲を低下させる要因ともなり得るのである。それらを改善するために、柔道の特徴を捉え、上記の5つの柔道の特異性を生かした評価を行うとともに、このポイントを単元評価計画に盛り込んでいくことが必要となる。

4.3 単元評価計画の作成

第4項の1、2の学習意欲を高める評価と柔道の評価の特異性を念頭におき、資料1の中学校第一学年、柔道の単元評価計画を作成した。なお、ここで作成する単元評価計画は、実習で実践したものを改善したため、単元の中でも固め技の部分のみに焦点を絞っている。

4.4 単元評価計画の考察

資料1内ふき出しの①から④の番号は4.1で明らかにした、「学習意欲を高める評価の要件」を当てはめたものである。まず身に付けさせたい力を導き、それを身につけさせるために不可欠な評価規準を設定する。それを評価するために最適な評価技法を選定し、その評価技法を誰が行うのが一番効果的かという順序で全ての評価計画を立てた。表3網掛けの部分に焦点を絞って、単元評価計画の特徴を以下に述べる。評価規準を観点別に考察していく。

◆関心・意欲・態度

この評価は、学習意欲を高める評価の要件④に対応している。生徒の活動を教師が観察して、「Aさんは意欲が低い」などと断定する評価を行うのではなく、生徒がどのようなことを考え、授業に取り組んでいたかを把握することができるよう、自己評価も併用してい

る。その自己評価をもとに次時で生徒へのフィードバックを行うことで学習意欲の向上を図る。また、従来の関心・意欲・態度の評価であれば「積極的に技の修得に励んでいる」というような規準で評価を行っていく。しかし、柔道の特異性のⅣを考慮し、運動を得意としない生徒からも柔道に対する苦手意識を取り除き、練習に取り組むことができるよう、メインとなる評価規準「積極的に技の修得に励んでいる」をさらに細かく項目分けし、より明確に設定した。

◆思考・判断

この評価は、要件③に対応している。お互いの学習ノートに良いところと改善点を書き合い、それを確認しながら練習を行う。学習ノートでしっかりと技のポイントを理解してアドバイスをを行っているかを評価し、行動観察でそのアドバイスを基に練習に取り組んでいるかを見る。さらに、お互いアドバイスを行う活動は相互評価の役割も果たし、要件④をも含んでいる。柔道の評価の特異性Ⅴの対策として、相互評価によるアドバイス交換で自分では気付かなかったことに気付かせる。教師が直接アドバイスを行うよりも仲間から受けることで、共に学び合う雰囲気作りや、競争意識の向上が期待でき、学習意欲の向上へとつながる。

◆運動の技能

この評価は要件②に対応している。ここでは、技能が目標に対しどれだけ達成されているかを評価する。この技能は柔道を行うにおいて必要不可欠なものであるため、能力が人より秀でているか劣っているかということよりも、技能のレベルが授業で求める規準を満たしているかどうかを評価する必要があるため、目標準拠評価を用いている。また、柔道の評価の特異性のⅡにもあるように、正しい形や方法で取り組めば、柔道は痛いスポーツでも怖いスポーツでもないということを実感させて学習意欲を向上させるために、細かいスモールステップな評価規準を設けて、生徒が目標を立てやすい、達成しやすいようにした。

◆知識・理解

この評価規準は要件①に対応している。最初に教師が解説を行った技のポイントをどれだけ理解しているかを学習ノートで評価する。この評価規準は単元全体で見ると形成的評価を中心に作成しているが、知識や技能の習熟度を学習ノートや実技テストで確認するなど、細かな形成的評価を取り入れている。早い段階で形成的評価を行うことで、現時点での生徒の実態が分かり、その後の授業の進め方を改善していくことで、生徒の学習意欲向

上につなげる。また、柔道の評価の特異性のⅠにあるように、柔道の授業ではけがの防止を徹底する必要がある。そこで、生徒の活動だけを見るのではなく、その活動がどういう考えのもとに行われているのか、しっかりと知識を獲得し、けがを防止するための取り組み方を理解しているのかを教師が把握するために、学習ノートを用いて授業中見えにくい部分を評価していく。

以上のように、単元の評価計画1時間分を見ただけでも、生徒の学習意欲を高めるための評価がさまざまに盛り込まれている。学習意欲を高める評価の要件①②③④は、各々が複合的な要素で構成されているが、実際に単元評価計画を作成していくと、その要件までもが同時に活用され、お互いに作用し合っていることが分かる。

5 研究の成果と今後の課題

5.1 研究の成果

本研究を通して、単元評価計画を作成する際のさまざまな留意点を明らかにした。単元評価計画を適当にそれらしい形式や文言で作成していくのではなく、目の前の生徒の実態を見つめ、単元の特性を十分に研究した上で、本当にその単元に必要な評価規準を設定していくことが求められる。

学習意欲を高める評価を行うために必要不可欠となるのが、評価の組み合わせを考えることである。一つの活動の中に複数の評価技法を用いることや、一つの単元に複数回評価を行うこと、また一人の生徒を複数人で評価していくことなど、多面的な角度から評価を実践していくことが重要である。ここで、誤ってはいけないことは、とにかく多くの評価規準を作成し、評価計画に羅列することである。それでは、評価者が何を評価するのか不透明になったり、被評価者が目標を明確に立てられないでいたりという問題が生まれてしまう。

例えば、柔道の技を上達させるために、まず知識として技のかけ方を定着させるために、知識・理解に明確な規準を立て評価を行っていく。それに伴い、生徒は知識・理解の習得に励み、技能が向上する。さらに、その技能の向上によって、今まで以上に関心・意欲・態度の質が向上する。このように、学習意欲の向上はあるひとつの観点を評価するだけで向上するものではない。それぞれの評価規準に意味を持たせ、評価の順序や、比率を考えるなど、すべてに系統性を持たせて単元評価計画を立てていくことが学習意欲を高める評価を行う上で、非常に重要である。

5.2 今後の課題

本研究は、教職専門実習の反省を元に行ったものである。そのため、実際に作成した単元指導計画を用いた授業を実践して、生徒の学習意欲が向上するのか検証を行うことはできていない。現場においてこの単元指導計画を活用して評価を行うことで、実際に期待している成果が表れるかを検証していきたい。この結果をもとにしてさらに改善を加え、効果的な単元評価計画へと改訂していく必要がある。

また、単元評価計画を作成したが、この評価規準をどれだけ生徒に明示するかという問題もある。すべての評価規準を生徒に提示してしまつては、生徒がどのように取り組んでいけばよいのか分からなくなり、逆に混乱や迷いを招く可能性がある。単元指導計画の中でもどの部分を強調して生徒に明示するかを考え、学校や生徒の実態に合わせた使い方を考えていく必要がある。

【引用文献】

- 1)北尾倫彦 編 2006『図でわかる教職スキルアップシリーズ3 学びを引き出す学習評価』図書文化社 P.22-23,P.26
- 2)北尾倫彦 監修 2012『観点別学習状況の評価規準と判定基準 中学校保健体育』図書文化社 PP.38-39
- 3)田中耕治 編 2009「よくわかる教育評価」ミネルヴァ書房 P.60
- 4)文部科学省 教育課程審議会答申 2000「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について(平成12年12月4日)」

資料1 中学校第一学年(柔道)単元評価計画

回数	学習のねらいおよび学習活動	評価規準・(評価方法)・[評価者]				
		関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解	指導者の働きかけ
2	① 固め技解説 - けさ固め - かた固め - 横四方固め - 上四方固め ○以上の技の基本的な形を指導者が模範となって解説する。	- 柔道の授業に臨む姿勢を心得て実践している。(行動観察)[教師評価] ①学習ノートにポイントをしっかりとメモしている ②競技を行わないときの姿勢をしっかりと保ち説明を聞いている		指導者の働きかけ、言葉かけも評価のひとつとなる。どのような生徒を対象にどのような言葉かけで意欲を高めるかを書いている。	解説を受けた技のポイントを理解し、説明することが出来る。(学習ノート)[教師評価]	正しい姿勢かつ真剣な眼差しで説明を聞く生徒を何人か列挙し、称える。
	② ペア練習 ○4つの固め技をペアでアドバイスし合いながら練習する。	- 積極的に技の修得に励んでいる。(行動観察、学習ノート)[教師評価・自己評価] ①向上心を持ち練習に取り組む姿勢を有している ②ペアで解決出来ないことを他のペア、教員に相談する ③ケガのないような態度で練習に臨んでいる	自分や友達の学習カードやアドバイスを正しい技のかけ方を確認しながら練習に取り組んでいる。(行動観察、学習ノート)[教師評価・相互評価]	- 固め技の基本的な形ができる。(行動観察)[教師評価・相互評価] ①けさ固めをかける際、相手の腕をしっかり自分にひきつけている ②肩固めをかける際、相手の後ろに回した手をしっかりと組んでいる ③横四方固めをかける際、いずれかの手で相手の襟を持ち、もう一方の手を相手の道着の太もものあたりを掴んでいる ④上四方固めをかける際、体を曲げず、相手に対してまっすぐ固めている ⑤上四方固めをかける際、相手の手の外側から手を回している	教員の説明を実技に反映させようとしている。(行動観察、学習ノート)[教師評価]	- うまく技をかけられていないペアに、良い点と悪い点を助言する。 - 学習カードを活用しているグループを評価する。 - 技を正しい形でかけられている生徒を褒める。
3	③ 全体練習 ○4つの固め技の基本姿勢が出来ているか全体で確認する。		前回の練習と比較して、自分の良くなったところを見つけることができる。(学習ノート)[自己評価]	- 固め技を、ポイントに留意し、正しい形でかけられている、受けられている。(実技テスト、パフォーマンス評価)[教師評価・自己評価] ①肩固めと上四方固めを正しい形でかけることができる。 ②いずれか3つの技を正しい形でかけることができる。 ③すべての技を正しい形でかけることができる。	各技を連続する際のポイントをしっかりと理解している。(学習ノート)[教師評価・自己評価]	- 積極的に練習に取り組むペアを列挙し、称える。 - 活動の中頃でしっかりと技をかけることが出来ている生徒を参考に、全員に対して体重差があっても効果的に技が決まっていれば外れないことを確認させる。
4	④ 連続技練習 - けさ固め→肩固め - 肩固め→横四方固め - 横四方固め→上四方固め - 横四方固め→肩固め - 肩固め→けさ固め ○以上の技の接続をリズムに合わせて円滑に行えるように練習を行う。 ○教員の解説を聞いた後、ペア毎に自由練習時間を設ける。	- 自由練習時間に積極的に練習に取り組んでいる。(行動観察)[教師評価・相互評価] ①制限時間いっぱい練習を行う ②お互いのよいところを活発に意見交換している	- ペアの生徒の課題を見つけることが出来る。自分の得意な技、苦手な技を選択し、練習することが出来る。(行動観察、学習ノート)[教師評価・相互評価] ①相手が技をかけやすいように受けの姿勢をとろうとしている ②適切なアドバイスをを行っている ③友達のアドバイスを聞いて自分の改善点に気付いて練習に取り組んでいる	④教師評価、自己評価、相互評価どれを用いるのかを示す。評価技法との兼ね合いを考えて選択している。 ④仲間と共にお互いの良いところと課題を学習ノートに書き合うことで、学び合いを意識付ける。	①実技テストだけでなく、授業の間に学習ノート等を用いて理解度を図る形成的評価を行う。	- 適切なアドバイスをを行っている者を何人か呼名する。 - 最も意見交換が活発であったグループにどのような意見交換を行ったか発表させる。

5 ⑤ グループ練習 ○連続技の練習を3人組で行う。取りと受けが一人ずつ、もう一人はリズムを取る役とアドバイスをを行う。	- 積極的に友達と意見交換を共有することが出来る。(行動観察、発表) [教師評価・自己評価] ①友達にアドバイスを求めている ②どのようなアドバイスをを行ったか積極的に発表する	- 自分のグループの生徒の良い点、課題点を指摘することが出来る。(行動観察、発表) [教師評価・相互評価] ①自分が出来る出来ないに関わらず、友達にアドバイスをを行うことができる。			
6 ⑥ 全体練習 7 ○指導者がリズムを取り、全体で一斉に連続技の練習を行う。			- ポイントに留意して、円滑に連続技を行うことが出来る。(実技テスト、パフォーマンス評価) [教師評価] ①けき固めから肩固めの体の運びを円滑に行うことができる。 ②けき固めから肩固めの接続をより実践的に行うことができる。 ③肩固めから横四方固めの体の運びを円滑に行うことができる。 ④肩固めから横四方固めの接続をより実践的に行うことができる。 ⑤横四方固めから上四方固めの体の運びを円滑に行うことができる。 ⑥横四方固めから上四方固めの接続をより実践的に行うことができる。	①単元の2～8時間のみを抜粋して作成した評価計画であるため、基本的には全て形成的評価であるということもできるが、その中でも実技テストという形で単元途中の生徒の実態を把握するための形成的評価を組み込んでいる。	
8 ⑦ 乱取りの練習 ○実際に試合形式で今まで修得した技を使う練習を行う。 ○体格差がある場合、時間内に勝負が決まらなかった試合は、体格が小さい者が勝者とする。 ⑧ 乱取り ○指導者が乱取りの仕方を解説し、ひざ立ち姿勢で固め技のみの乱取りを行う。 ○3人1組のチーム戦で行い、先方・次峰・大将は各グループで相談して決める。	- 積極的に授業で修得した技を実践しようとしている。(行動観察) [教師評価] ①修得したすべての技を実践しようとしている ②受けと取り両方を練習している ③勝敗を受け入れすべて全力で勝負している	相手に合わせて、自分に適した戦い方を考え、実践しようとしている。(行動観察、学習ノート) [教師評価・自己評価]	- 授業で修得した技を流れの中で実践することが出来る。(行動観察) [教師評価] - 乱取りで多くの相手に勝利することができる。(行動観察) [教師評価]	乱取りを行う際の約束事項、戦い方をしっかりと理解している。(学習ノート) [教師評価]	- 受けの逃げ方の練習を強化する。 - 逃げ方が上手な生徒を称える。 - 高度な技が決まったときに全体に知らせるように褒める。 - チームで作戦を立てる際の選択肢を助言する。 - 勝者を称える。 - 敗者のよかった点を助言する。

③体格差や運動が苦手な実践に学んだことを生かせない生徒でも、しっかりとした思考・判断が行われている可能性があるため、行動観察だけでなく学習ノートでの評価も同時に行う。

②集団準拠評価を用いている。
絶対評価が基本ではあるが、試合での勝敗を楽しむ、受け入れるためには集団準拠評価が必要となる。